
図書室

choro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書室

【Nコード】

N4422D

【作者名】

choro

【あらすじ】

放課後の図書室で、お互いに想いあっているのに気づかない二人のお話です。

第1話

放課後の図書室にいつもいる彼女に恋をした。

いつも同じ場所に座る彼女。窓側の席。

その2こ斜め向かい側が僕の指定席。

真剣に勉強している姿が可愛くて、

ときどき本を読んでいるその姿は微笑ましくて。

僕は本を読む振りをして彼女を見つめる。

でも、気づいてしまった。

勉強の合間に外を見つめる彼女。

何を見ているんだろう。

校庭では、サッカー部が練習しているはずだ。

気になった僕は、彼女の視線の先を追った。

サッカー部の先輩だ。

もしかして、彼女は・・・。

僕の思いは叶わないのかもしれない。

それでも僕は彼女を見つめ続ける。

第2話

放課後の図書室。

いつも同じ場所に座る男の子がいる。

いつもそこで本を読む。

そういえば読書以外の事をしているとこって見たことないな。

でも、

本を読んでいる姿が、なんだか絵になっていて、いいなって思った。

それから、近すぎず遠すぎない2こ斜め向かい側が私の座る場所。

ずっと眺めていたい。

でも恥ずかしいから、私は一生懸命勉強している振りをする。

疲れてくると彼の姿を見たいと思うけど

やっぱり恥ずかしいから彼とは反対側の外を見てしまう。

外ではサッカー部が練習中。

私の席は窓側だから、

外が良く見えるんだ。

私のお兄ちゃんがサッカー部のキャプテンだ。

ふふ、今日も頑張ってる。頑張れお兄ちゃん。

あゝあ、こんなことでないで彼と話ができれば良いのに。

でも・・・今日も彼と話ができない。

クラスが違ってから、接点もないし、きつかけも無い。

きっと私の名前なんて知らないんだろうな・・・

でも、私も彼のことを良く知っているわけじゃない。

どんな声で話すんだろう？

好きな子とかいるのかな？

知りたいことがいっぱいある。

そして、彼にも私を知ってほしい。

願わくば・・・私のことを好きになってもらいたいノノ

話してみたい・・・。

誰か、きっかけをください。

第3話

いつもと同じ放課後。

彼もいつもの場所で本を読んでいる。

あつ、彼の読んでいる本、前に読んだことのある本だ！

『きみとの接点』

甘い感じの恋愛小説だった気がする。

そういうのも読むんだ。

なんだか彼との距離が近くなっ たみたい。

彼の読む本はファンタジーから哲学書みたいな難しいものまで何でもござれだ。

私はあんまり難しいのは読む気がなくなってしまう。

恋愛小説とかファンタジー系ならよく読むのに・・・

前に一度彼が読んだ本を借りて読んでみようと思ったけど結局挫折。

うん・・・

今日は太陽の機嫌がいいみたいで、私の窓際の席はポカポカだ。

勉強する気分じゃないから前から気になっていた本を読むことにした。

3分の1くらい読んだところで、ちょっと一息。

うん、やっぱりおもしろい。

本の世界に入り込んでたためか、いつもの私^がとらない行動

・・・彼のほうを見てしまった。

視線がぶつかる。

えっ。

いつから見られてたんだろう。

うわっ恥ずかしい。

私の百面相もしかして見られた！？

本を読むと感情移入しちゃうから・・・周りも見えなくなっちゃうし。

あゝあ。

恥ずかしい／／

こういう場合は・・・

とりあえず笑ってごう。よし。

第4話

今日はとても天気がいい。

僕はいつものように図書室で本を読む。

彼女はまだ来ていないようだ。

彼女が来た。

どうやら今日は本を読むらしい。

前から彼女が読みたそうにしていた本だ。

確か有名なファンタジー系の話だった気がする。

本を読んでいる彼女の表情はくるくる変わる。

心が柔軟なのだろう。

主人公に共感しているに違いない。

勉強している姿も良いけれど、

やっぱり僕はこのくるくる変わる表情が可愛いと思う。

今日は彼女の席はとても日当たりが良くて、

そこに、彼女のほわっとした雰囲気があわさって、

そこだけ空気の流れが違うみたいだ。

どれくらい彼女のことを見ていたのだろう。

彼女の本は3分の1ほど終わっていた。

彼女が顔を上げる。

本の余韻なのか、彼女の表情はどこか現実味を帯びていない。

ふと、彼女が僕のほうを見た。

視線がぶつかる。

もしかして、見てるのがばれた？

どうしよう・・・

数秒の間ののち、彼女はゆっくりと微笑んだ。

えっ・・・

ふわっとしたその笑みに僕の目はくぎづけになる。

か、可愛すぎる／＼

でも、僕が見ていたのに気づいたんだったら、

どうして怪訝そうな顔ではなく、笑ったんだろう？

とにかく、笑顔には笑顔で返すべし！だ。

僕も彼女に微笑んだ。

第5話

う、上手く笑えたかな？

なんだか凝視されている気がするのは気のせい？

どっかへんかなあ。

次の瞬間、彼は笑った。

か、かつこいい。

私に笑ったんだよね。

どうしようこれを機に何かおしゃべりでも・・・

うー、話題話題・・・なんでもいいや。よしっ

「何読んでるの？」

知ってるけど・・・

「これ？『きみとの接点』だよ。読んだことある？」

「あ、ある！」

「ふん。その本面白そうだね。」

「うん！とっても！」

本当に面白いのでつい力いっぱい断言してしまった。

私の答え方が面白かったのか、彼の顔が緩む。

そんなことより私、単語しか答えてないんですけど・・・

何とかしなくてはっ

それから何かしゃべったけどあんまり良く覚えてなくて

気づいたら帰り道。隣には彼。

暗くなっちゃったから送る。って。

初しゃべりをした上に一緒に帰れるなんてうれしくて

思わず「お願いします。」なんて言っちゃったけど、

二人っきりだよ！・・・緊張する。

ふと彼のほうを見ると、なんだか苦しそうな顔してる。

私と一緒にいるのやなのかな？。

「ねえ、いつもサッカー部のほうを見てるけど誰を見てるの？」

彼が突然聞いてきた。

「？ おにいちゃんだけど？」

私が答えると、彼はほっとしたような顔になった。

「そっか、おにいちゃんか。」

彼がつぶやく。

もしかして誤解されてた？

「じゃあ好きな人いる？」

彼に、どうやってこの気持ちを伝えようかと考えていたときに

この質問だったので、

私は彼の眼を見たまま固まってしまった。

自分の顔がどんどんほてっていくのが判る。

それを自覚して彼の顔を見ていられなくなり、

あたふたと視線をさまよわせる。

「君が好きだよ。」

彼の言葉にまた固まってしまった・・・

うそっ、ほんとに？

へ、返事しなくちゃ！

私も好きですって。

「・・・わたしも／＼」

私の返事は最後まで言葉にならず、

ささやくような小さな声だったが、

彼には通じたらしい。

とってもうれしそうな顔をした。

第6話

「何読んでるの？」

いきなり彼女が聞いてきた。

「これ？『きみとの接点』だよ。読んだことある？」

実は彼女が読んでるのを見て借りた本。

「あ、ある。」

彼女が答える。

「ふん。その本面白そうだね。」

「うん！とっても！」

少しからかい気味に言ったのに、力いっぱい肯定されてしまった。

やっぱり可愛い。

つい顔が緩んでしまう。

それからなぜか判らないけど彼女が一生懸命しゃべってくれて、

気が付いたら外が真っ暗。

ちよつとやばいかも。

「暗くなっちゃったから、送っていくね。」

少しは抵抗があるかと思ったのにあっさり「お願いします。」って
言われて少しうれしくなった。

それって、僕と一緒にいても良いってことだね。

隣に彼女がいる。

彼女と話せて、一緒に帰るっていうオプションまで付いたうれしさで忘れてたけど、

彼女には好きな人が・・・。

でもほんとにそうだって確定したわけじゃないし。

よしっ、ここは事実確認を。

「ねえ、いつもサッカー部のほうを見てるけど誰を見てるの?」

少し恥ずかしそうな答えが返ってくると思っていたのに、

彼女は不思議そうな顔をして、

「？ おにいちゃんだけど？」

といった。

へ？おにいちゃん？

じゃあ好きな人じゃないのか。

はーよかった。

「そっか、おにいちゃんか。」

そつとつぶやいた。

じゃあ、彼女に好きな人はいるのだろうか？

「じゃあ好きな人いる？」

僕の疑問は知らぬ間に口から飛び出していた。

彼女は驚いたように僕の眼を見たまま固まってしまった。

その顔がだんだんと真っ赤になっていく。

この反応ってもしかして・・・／／／

金縛りが解けてきたのか、顔を赤くしたまま、

あたふたと落ちつかなげに視線をさまよわせる彼女を見て、

僕の疑問は確信に変わった。

そして僕は彼女を手に入れるべく口を開いた。

「君が好きだよ。」

再び固まってさらに顔を赤くする。可愛い。早く返事をして？

「・・・私も／＼」

小さな声で彼女がささやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422d/>

図書室

2010年10月9日06時19分発行